

# 日本コミュニケーション学会九州支部 第21回大会

## プログラム

**The Communication Association of Japan**

**Kyushu Chapter**

**The 21st Annual Convention**

大会テーマ： 介護・福祉とコミュニケーション

2014年10月4日（土）

**October 4th (Sat), 2014**

ホルトホール大分（408会議室・410会議室）

〒870-0839 大分県大分市金池南 1-5-1

代表（インフォメーション）TEL 097-576-7555 / FAX 097-573-6210

**Horuto Hall OITA**

1-5-1 Kanaike-Minami, Oita, Oita-Ken

Tel : 097-576-7555 Fax : 097-573-6210

<http://www.horutohall-oita.jp/>

\* CAJ九州支部第21回大分大会は、日本文理大学商経学会より学会助成金を頂いております。ご厚意に感謝申し上げます。

## 日本コミュニケーション学会九州支部 第21回大会

日本コミュニケーション学会会員各位

下記のとおり第21回九州支部大会を開催致しますので、ご案内申し上げます。どうぞ奮ってご参加ください。

日本コミュニケーション学会九州支部 支部長 伊佐 雅子

### 大会案内

1. 大会参加者は**参加費 1000 円**を当日、受付にて納入してください。
2. 九州支部会員の方は支部総会に必ずご出席ください。
3. 昼食はできるだけ、**弁当（お茶付き、1000 円）**を予約するか、ご持参ください。
4. **懇親会費は 4,000 円**です。参加される方は同封の葉書でお申し込みの上、当日受付にて会費を納入してください。9 月 25 日以降に申し込みをキャンセルされた場合は会費の全額を申し受けます。
5. 大会会場は、408 会議室、410 会議室です。
6. コーヒー、お茶、その他の飲み物等は**休憩室**に準備してあります。ご自由にお取りください。
7. 問い合わせ先  
大会実行委員長 清水 孝子（日本文理大学）  
e-mail sugatk@nbu.ac.jp  
電話 097-524-2759 (直通)または 097-592-1600(大学代表)  
Fax 097-593-2071

### 発表者の皆さまへ

1. プロジェクターの機器は会場に用意してありますが、パソコンはご持参ください。また、接続等は、開場後（9 時以降）研究発表までの時間に、ご自分でご確認ください。
2. ハンドアウトを準備する場合は 30 部程度ご用意いただき、発表前に配布してください。また、発表時間は質疑応答を含め 30 分です。**発表時間は厳守ください。**
3. やむを得ない事情で発表ができなくなった場合は速やかに大会実行委員長までご連絡ください。

## スケジュール

9:00～ 受付(408会議室)

9:30～9:50 開会式 司会: 筒井 久美子 (立命館アジア太平洋大学)

支部長挨拶: 伊佐 雅子(沖縄キリスト教学院大学)

来賓挨拶: 橋本 堅次郎 (日本文理大学経営経済学部学部長兼  
日本文理大学商経学会会長)

10:00～12:10 研究発表

### 408会議室

司会: 高瀬 文広 (福岡医療短期大学)

10:00～10:30 Apprehending the semiotics of Japanese typography in advertising  
PUEL, Flavien (Seinan Gakuin University)

10:30～11:00 自動車のマーケティング戦略と車の広告表現の文化差  
—日本とアメリカの比較—  
百瀬 有幸 (沖縄キリスト教学院大学大学院)

### 10分休憩

11:10～11:40 アルメイダの病院運営と布教活動を通して考える異文化コミュニケーション  
清水 孝子 (日本文理大学)

11:40～12:10 自己から学ぶということ  
—介護現場実習における主体と客体の捉え直し—  
五十嵐 紀子 (新潟医療福祉大学)

## 410会議室

司会：佐藤 勇治（熊本学園大学）

10:00～10:30 言語とアイデンティティ  
—沖縄在住のアメリカ国籍と日本国籍の親をもつ人々の事例をもとに—  
石川 直美（琉球大学大学院生）

10:30～11:00 公害を語り継ぐためには  
——四日市再生「公害市民塾」連続 10 回土曜講座から考える  
池田 理知子（国際基督教大学）

## 10分休憩

11:10～11:40 英米文学関連科目の講義を受講した大学生の卒業後の変容  
—インタビュー調査を通じた卒業生の「語り」を通して—  
鎌田 史（沖縄キリスト教学院大学大学院研究生）

11:40～12:10 映画『大統領の執事の涙』(*The Butler*)に見る父と息子の  
コミュニケーション  
宮下 和子（鹿屋体育大学名誉教授）

12:10～13:10 昼休み(昼食)

\* 410会議室は食事室、休憩室として利用できます

13:10～13:50 支部総会（会場：410会議室）

司会：丸山 真純（長崎大学）

14:00～15:00 公開基調講演（会場：408会議室）

講演者紹介：清水 孝子（日本文理大学）

演題：「地域包括ケア時代のコミュニケーション」

講演者：鶴田 恵子（日本赤十字看護大学教授）

**15:00～15:15**      **休憩(15分)**

**15:15～17:00**    **公開シンポジウム** (会場:408会議室)

司会: 畠山 均(CAJ学会員:長崎純心大学教授)

テーマ:「介護・福祉とコミュニケーション」

パネリスト: 佐藤 俊介 (吉川〔きっかわ〕医院院長)

生野 秀子 (大分赤十字病院医療連携・患者支援副センター  
長兼訪問看護ステーション課長)

宮下 和子(CAJ学会員:鹿屋体育大学名誉教授)

コメンテーター: 鶴田 恵子 (日本赤十字看護大学教授)

**17:00～17:10**    **閉会式** (会場:408会議室)

司会: 筒井 久美子 (立命館アジア太平洋大学)

**18:00～**            **懇親会 壺中の天地**(大分駅より徒歩約10分)

**会費 4,000 円(飲み物代別)**

## 日本コミュニケーション学会（GAJ）九州支部第21回大会

### 学会テーマ：「介護・福祉とコミュニケーション」

#### ■基調講演：「地域包括ケア時代のコミュニケーション」

日時：10月4日（土）14:00～15:00

会場：「ホルトホール大分」408会議室

#### 基調講演

##### 「地域包括ケア時代のコミュニケーション」

日本赤十字看護大学 教授 鶴田 恵子



国民皆保険・皆年金の達成から半世紀を過ぎ、少子高齢化が進み、雇用環境の変化など社会が大きく変化している。団塊の世代が75歳以上の後期高齢者となる2025年には、後期高齢者が2000万人を超え総人口の18%を占めると予測されている。高齢化と医療技術の進歩により、医療の需要は増加するものの、医療費を抑制するために、病院の在院日数が大幅に短縮されている。繁忙な医療現場で看護マンパワーを増員しても医療事故を防ぐには至っていない。さらに、患者・家族への説明と納得は、インフォームドコンセントとして定着してきたが、その評価は十分にされているとは言い難い。

日本赤十字看護大学では、学部で看護基礎教育、大学院で看護管理者教育を担当している。本学の教育目的は、「赤十字の理念」に基づき、看護の実践と研究に必要な基礎的能力をもち、人類と国際社会に貢献できる、幅広い教養と豊かな人間性のある人材を育てることにある。教育目標を7つ掲げ、第1の目標を「人間それぞれに固有の価値観をもったかけがえのない存在であることを理解するために必要な知識と感性を身につけ、かかわり合うことができる基礎的能力を養う」とし、看護者としてのコミュニケーション力の向上に積極的に取り組んでいる。平成24年度入学者からカリキュラム改正を行い、2年次の実習を3週間から5週間に延長し、看護過程全般を丁寧に実習することでコミュニケーション場面が大幅に増加し到達度が向上した。

しかしながら、コミュニケーションの重要性を学習してきたにも関わらず、卒業生たちは、勤務する病院の繁忙さに追われ、個別のかかわりが出来ないことを苦にして離職する事例が続いている。病院サイドでもリアリティーショックを防ぐ方策に取り組んではいる。その一方で、病院は在院日数を短縮させるために、病名ごとにクリニカルパスという作業工程表を作成し、効率的な治療の遂行に取り組み、さらに、DPCと言われる診断名ごとの平均在院日数が公定価格である診療報酬と連動することから、在院日数を短縮させる方向へとさらに進み、治療を中心とした看護システムが形成されているのが現状だ。

ところで、昨年から今年にかけて、個人としても両親の介護や看取りの体験を通して、家族としてのコミュニケーションを考える機会が多かった。コミュニケーションのとれない意識不明の母の看取り、意思のある父の介護経験は、故郷でひさしぶりに3人の子ども世代が40年ぶりに過ぎ語り合う時間を与えてくれた。父が骨折し、介護保険制度を活用しながら在宅療養を進めて5年が経過していた。

現在、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援のもとで、可能な限り住み慣れた地域で生活を継続することのできるような包括的な支援・サービス提供体制の構築を目指す「地域包括ケアシステム」が提唱されている。地域包括ケア時代のコミュニケーションの課題を紹介し、私個人の家族との実体験をもとに「当事者そしてその家族の選択と心構え」について考察する。

## 〔講師紹介〕

鶴田 恵子(つるた・けいこ)

1952年生まれ。高校まで大分県大分市で育つ。看護学修士(聖路加看護大学大学院)。横浜市衛生局次長、東京医科歯科大学医学部附属病院病院長補佐・看護部長を経て、現在、日本赤十字看護大学教授。日本看護管理学会理事長兼任。主な著書・論文に、『看護ユニットマネジメント』(医学書院、2006)、『リエゾン精神看護』(中山書店、2006)、「看護職の賃金制度の現状に関する実態調査」(2008)、「専門看護師と認定看護師の賃金体系モデル案」(2008)などがある。

## ■シンポジウム:「介護・福祉とコミュニケーション」

日時:10月4日(土) 15:15~17:00

会場:「ホルトホール大分」408会議室

司会: 畠山 均 (CAJ学会員:長崎純心大学教授)

パネリスト: 佐藤 俊介 (吉川<sup>きっかわ</sup>医院院長)

生野 秀子 (大分赤十字病院医療連携・患者支援副センター長兼訪問看護ステーション課長)

宮下 和子 (CAJ学会員:鹿屋体育大学名誉教授)

コメンテーター: 鶴田 恵子 (日本赤十字看護大学教授)

鶴田先生の講演を受けて、本シンポジウムでは支部大会テーマである「介護・福祉とコミュニケーション」について、基調講演者を交えて進めていく。介護現場の実態について、コミュニケーションの観点から、立場の異なる3人のパネリストがそれぞれの事例を紹介しながら、テーマについて考えていく。また、そこから見えてくる問題に、今後のコミュニケーション研究がどう関わっていくべきかを、フロアーの皆様と考えていきたい。

## 〔パネリスト紹介〕

### ① 医師として: 佐藤 俊介

大分県別府市に生まれる。京都大学医学部卒、医学博士(京都大学医学部大学院)。1987年アメリカ国立衛生研究所(NIH)客員研究員、1989年京都大学病院放射線助手を経て、1992年吉川医院副院長。2001年独立型ホスピス・大分ゆふみ病院創設、初代院長、2002年より現在まで同院顧問、2007年より吉川医院院長。

### ② 看護師として: 生野 秀子

大分県大分市に生まれる。1987年より大分赤十字病院に看護師として勤務。1998年より大分赤十字病院訪問看護ステーションに配属される。2002年大分赤十字病院訪問看護ステーション・居宅介護支援事業所管理者を経て、2009年より訪問看護認定看護師。現在、大分赤十字病院医療連携・患者支援副センター長兼訪問看護ステーション課長。

③ 介護する家族として：宮下 和子

鹿児島市出身。英語英文学専攻(九州大学文学部)。アメリカ研究修士(ペンシルバニア州立大学大学院)。1991年9月より鹿屋体育大学勤務、2013年3月末早期退職。現在、鹿屋体育大学名誉教授、鹿児島大学理工学研究科大学院非常勤講師「学際的英語」、立命館大学客員研究員、放送大学「アメリカ文化研究会」講師。

〔パネリストの発言概要〕

佐藤先生(医師としての立場から)：

医師としてなすべきことの一つは、患者・その家族に対して、現在の状況を客観的・論理的に説明することである。しかしながら、その前提として、患者・その家族の心情・心理、バックグラウンド、理解力などを推測しながら、相手にわかる言葉で話していくという態度が不可欠である、と考える。そのような意味のコミュニケーションがあつて初めて、患者・その家族に対して、客観的事実・情報を伝えることが可能になり、そこから信頼関係も深まっていく。特に、ホスピス医療などを通して、患者サイドにたったコミュニケーションは、お互いの認識のギャップを埋めることを可能にする、と感じている。患者・その家族と医療チームが信頼関係を深めながら、死に近い患者と、時には、琴線に触れる瞬間を共有し、患者と医師の双方が成長出来たと感じることもある。事例を紹介しながら、医師として、患者・その家族とのコミュニケーションについて、お話ししたいと思う。

生野氏(看護師としての立場から)：

看護師として働き始めて20数年が経過した。病院勤務の頃は、急性期医療の中で懸命に働きながらやりがいも感じていた。患者の訴えを聞くというコミュニケーションを通して、疾患の回復や安寧をもたらすケアを模索していた。私にとって患者とのコミュニケーションは、次の看護ケアを構築する手段だった。現在の医療現場は、「治療の選択」が、医療提供者側の常識を基にした“パターンリズム”というスタイルから、患者側に寄り添う“アドヒヤリング”というスタイルに変わった。とはいえ、患者・その家族と医療提供者側の間には、医療専門分野における知識量に圧倒的差があり、自らの「意思決定」や「治療の選択」を行うことが困難な状況にある。加えて、「治療の選択」が、医療の進歩、高齢化、家族形態の変化に伴う介護のあり方に左右されるという新たな課題も顕在化している。いま、看護師には、患者・その家族に対してその「意思決定」のために必要な情報を提供するだけでなく、彼らがどんな生き方をしてきたかという生活者としての価値観を共有できるコミュニケーション力も求められている。

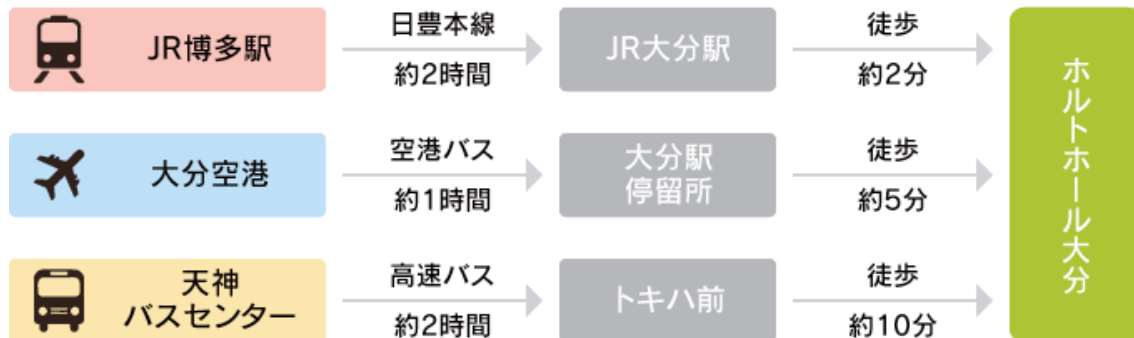
宮下先生(家族としての立場から)：

2002年4月、一人暮らしの母親の大たい骨骨折以来、介護保険サービスを受け、ケアマネ、在宅サービス、デイケア施設、配食サービス、病院及び医師とのコミュニケーション、—いずれも複数—に関わってきた。数年前から両膝の状態も悪化し、私の早期退職を機に昨年6月手術。リハビリ病院への転院や退院後のデイケアから通所リハへの変更も経験した。新たな症状に伴う県内外の病院での診断を巡る各機関との連絡、度重なる「担当者会議」や介護保険の更新手続きなど、膨れ上がるファイルの前に一連の作業を振り返ると、まさに「コーディネーター」と言える。家族が、点と点を結ぶ線、いわば介護保険サービスの「ネットワーク・カルテ」を求めるのは行き過ぎであろうか。一方個人的には、母娘のコミュニケーションの最終章に丁寧に向き合いたいと願っている。



## アクセス

ホルトホール大分(大分駅前;上の森口よりすぐ)



\* 高速バスで来られる方は、トキハ前下車後、後方の大分駅方面に向かい、いったん大分駅に入り、反対側の「上の森口」に出てください。正面に「ホルトホール大分」が見えます。

### 懇親会会場： 壺中の天地

大分市府内町 3-7-27(大分駅より徒歩約 10 分;大分県庁近く)

TEL 097-532-5555

<http://www.cocyu-ten.com/top.html>



ホルトホール大分から徒歩15分ほどです。